



Title	大原孫三郎による多面的経営展開と社会・文化向上貢献に関する研究
Author(s)	大津寄, 勝典
Citation	大阪大学, 2003, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/44198
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	大津寄 勝 典
博士の専攻分野の名称	博士（経済学）
学 位 記 番 号	第 17444 号
学位授与年月日	平成 15 年 2 月 20 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当 経済学研究科経済理論専攻
学 位 論 文 名	大原孫三郎による多面的経営展開と社会・文化向上貢献に関する研究
論 文 審 査 委 員	(主査) 教授 阿部 武司
	(副査) 教授 宮本 又郎 教授 澤井 実

論文内容の要旨

大原孫三郎（以下、大原と記す）は 1880 年岡山県倉敷に生まれ、1900 年頃から倉敷・岡山地方を越えて、大阪などでも活躍した戦前の重要な企業経営者であり、「日本のオーウェン」と呼ばれるようになった社会事業家でもあった。先代孝四郎の事業を継承した大原は、1906 年に倉敷紡績社長および倉敷銀行頭取に就任した。倉敷紡績は先代が関係した創立のころ紡績連合会加盟 34 社中第 16 位であったが、大原の時代になって設備拡張と合併推進により大いに成長した。1924 年から倉敷紡績本店実験所の設立が計画され、紡績ハイドロフラフト技術の開発、ス・フの紡出、エネルギー・コストの引下げなどが検討されて、その成果をもとに 29 年には深夜業が撤廃された。昭和初期の不況下で同社は一時経営不振に苦しんだものの、その後業績を回復し、大原が没した 1943 年に倉敷紡績は戦時下の 10 大紡の 1 社として存立が許された。銀行に目を転ずれば、1913 年頃岡山県内には 50 行があったが、大原の指導により倉敷銀行をはじめ 6 行が合併して第一合同銀行ができ、同行はさらに山陽銀行と合同して 1930 年、中國銀行が形成され、岡山県では、政府が勧奨していた一県一行が実現した。さらに大原は、1925 年には世界的にみても新興産業であった化学繊維（レーヨン）工業に着目して、京都帝国大学との技術提携の場として京化研究所を創立し、26 年にはフランスのランポーズ式の技術と工場分散設置主義に基づき倉敷絹織（現クラレ）を設立した。同社は職業病対策にも力を注いだ。33-34 年におけるわが国の人絹ブームもあざかって倉敷絹織も大いに発展し、1937 年に生産高で、先発の帝人に次ぐ地位に達した。

本論文ではまず第 1 部「多面的経営展開」で、以上で概略を述べた大原の経営活動について考察する。具体的には労働理想主義、人格主義と称される彼の経営理念をみたのち、事業の柱であった倉敷紡績について詳しく分析し、次いで金融、電力、新聞、化繊工業、羊毛工業といった多彩な事業への取組みを検討して、それらを地方財閥論の視角からまとめる。

ところで、大原家は最盛期に 2500 人余りの小作人を擁した岡山県下有数の大地主であったが、いわゆる寄生地主ではなく、農業の発展に大きな関心を持っていたのであり、1914 年に 100 町歩を寄付して日本における最初の民間研究所とされる大原農業研究所をつくった。のちにはそこにさらに 100 町歩を寄付した。また、大原は、キリスト教に立脚した慈善事業家石井十次から多大な感化を受け、その活動を支援していたが、彼の亡きあと石井が力を注いでいた岡山孤児院を閉鎖し、それに代えて大阪に 1918 年、社会救済のため石井記念愛染園をつくり、さらに翌年、社会問題の科学的研究機関として、所長に就任した前東京帝国大学教授高野岩三郎をはじめ当時の優秀な経済学者多数

を専任の研究員として招聘し、研究を推進してもらうべく大原社会問題研究所を創設した。第一次大戦後、日本の社会状況は大きく変化し、産業化の本格的進展に伴い労働問題が深刻化した。1921年には産業化の弊害ともいべき諸問題の医学的心理的研究のため、大原はさらに倉敷労働科学研究所を倉敷紡績工場内に併置し、優秀な若き医学士暉峻義等を研究員に招き、労働と疲労に関する研究の推進を彼にゆだねた。大原は、倉敷に1923年、従業員向けの本格的な病院もつくり、これを27年に倉敷中央病院として一般市民にも公開し34年には財団法人化した。そして1930年には倉敷に大原美術館を設立した。かつて奨学生として大原の支援を受けた児島虎次郎は東京美術学校を卒業後やはり大原の助成を受けてベルギー、フランスなどで作画を学び、その研鑽を深めるとともにエル・グレコ、モネ、マティスなど多数のヨーロッパ名画の収集にも努め、倉敷の地に本格的な民間美術館を建設する必要性を大原に説き、大原は、それが多くの人々の社会教育にもなるとする児島の心情を了解したのである。第2部「社会・文化向上貢献」では、こうした幅広い、しかも優秀な人材から成る人脈に支えられて倉敷という地方都市を拠点として戦前期に花開いた大原のフィランソロピー活動が、社会教育事業、農事改良と大原農業研究所、農会と協和会、岡山孤児院・石井記念愛染園、大原社会問題研究所、倉敷労働科学研究所、倉紡中央病院（倉敷中央病院）、大原美術館の順に考察され、最後に大原の寄付・助成活動が金額的に確認される。

地方財閥たる大原はビジネスとフィランソロピーとを調和させ、そのうえにたって多面的に経営を展開し、さらに社会・文化向上に貢献する事業を繰り広げたのであった。そのフィランソロピーの意義を再度強調した結語では、戦前期日本における他の企業家の社会貢献活動の概要も示されている。

論文審査の結果の要旨

本論文は、綿紡績をはじめ多数の産業分野で旺盛な事業を展開し、社会貢献事業にも巨歩を残した大原孫三郎の経営活動と社会・文化向上貢献を詳細に論じた実証研究である。大原に言及した既存文献を超えて、本論文によって解明された事実は少なくない。金融・電力・新聞・羊毛工業などにも進出し、地方財閥として大をなしたこと、奨学金貸与や農業への支援なども含む幅広いフィランソロピーの実態等はその好例である。大原がいかなるビジョンを持ってビジネスから得た利益を社会貢献に投じていたのか等、今後検討を要する論点はあるものの、本論文は博士（経済学）の学位に値するものと判断される。